

幕末・明治初期の通婚圏

— 徳島藩明治三年戸籍の分析 —

井 戸 庄 三

通婚圏の調査・研究は、従来、主として村落社会学の分野で活発におこなわれてきた。村落社会学では、直接的には通婚圏の広狭およびその時間的変遷を把握しようとするが、間接的には村落の社会構造を究明するのが根本的なねらいであった⁽¹⁾。すなわち池田義祐⁽²⁾によれば、通婚はそれ自体としてはけっして頻繁におこなわれる社会的接触交渉ではなく、むしろ稀なものであるにしても、その背後には種々の社会的接触交渉が先行しており、この意味において通婚圏の研究は、農村、山村、漁村とか都市とか教団とかいった一定の社会集団の、あるいは上層・下層といったような特定の社会層の封鎖性⁽³⁾と開放性およびこれに伴う等質性と異質性を測定する一つの重要な基準を探索するという点に、すぐれて社会学的な意義が認められるとされている。たしかに従来の村落社会学の通婚圏研究は、村落の閉鎖性、開放性を測定する尺度として部落内婚率ないしは村内婚率を異常なほどに重視し、さらにその時間的変遷の分析に研究の焦点をしばっていたようである。

ところで歴史地理学の分野でも、壬申戸籍を基礎資料として、幕末・明治初期の通婚圏研究がかなり活発におこな

われてきた。しかしその大半は、通婚圏を幕末・明治初期の「地域と地域の結びつき」を解明する一つの手がかりとして各地の『市町村史(誌)』のなかの一節にとりあげたり、あるいは交通集落の開放的・流動的性格、都市の勢力圏などをする一指標としてとりあげたもので⁽⁴⁾、⁽⁵⁾、通婚圏そのものと本格的にとりくんだものではなかった。この点で、さいきん発表された池野茂の『明治初期の婚姻圏に関するノート』(関西学院高校論叢 一四号 一九六八年)は画期的な業績といえよう。従来の村落社会学の通婚圏研究では、調査対象がせいぜい同一県下の数カ町村にとどまっていたのに対し、池野論文は西日本を中心として五七カ町村の壬申戸籍を分析しているのがなによりも大きな特長である。そして池野論文は、この五七カ町村を農村、山村、漁村、都市などに分類して、それぞれの通婚圏の特色を分析し、地域社会の結合状態の測定を試みている。しかしこの池野論文にも、つぎのような問題点がのこっている。(一)壬申戸籍では、戸籍編成以前に他町村へ婚出した人々が把握できない。婚出の記載は戸籍簿が実際に使用された数年たらずで、婚出と婚入の比較が無理である。(二)村内婚率と農業戸数・通婚相手村数・通婚最大相手村比率などの比較は、当該村の村落規模(戸数)を考慮しなくては意味が薄れる。(三)農村から都市への婚出を「町場への人々の憧憬の反映」として簡単に片づけてしまつてよいものだろうか。(四)通婚圏は、平面的には地域の側面より地域的通婚圏と立体的には階層の側面より階層的通婚圏との二つに大別されるが⁽⁶⁾、後者の分析が十分とはいえない。(五)五七カ町村という事例数の豊富さは大きなメリットであるが、婚姻慣習のローカリティを考えると、石川県、京都府、山口県、佐賀県などの各町村の通婚圏を同一の視野で比較、検討するのはかなり危険である。以上(一)～(五)のうち、(一)と(四)は池野も論文でことわっているが、壬申戸籍の資料的限界で如何ともしがたく、従来の通婚圏研究に共通のウィーク・ポイントであった。

二

徳島藩では、明治三年にいわゆる庚午戸籍⁽⁷⁾が編成され、現在も徳島県内の各地に多く保存されている。戸籍の系譜については、すでに別稿で詳細に論じている⁽⁸⁾⁽⁹⁾ので省略するが、庚午戸籍には壬申戸籍にはみられないつぎのような記載がある。(一)各戸ごとに持家・借家別、土蔵・納屋などの有無、田畑・山林所有面積、船・牛馬の所有数など、民産が記載されている。(二)戸籍編成以前の婚出者については、実家の戸籍の該当者名に点をかけて収載し、同時に婚家の所在地、相手の身分・名前が併記されている。(三)徳島藩の棟付帳⁽¹⁰⁾にみられる身居の伝統がのこっていて、町人・百姓・加子(水主)などと稼人・来人を明確に区分しており、稼人・来人については、出身地と転住の年月が記載されている。このうち(一)は階層的通婚圏を検討する場合に有効であり、(二)は婚入・婚出についてほぼ同時期、同程度に比較することを可能にしてくれる。また(三)については、詳細は後述するが、戸籍に記載されている婚姻が、はたして戸籍編成時の居住地で実際におこなわれたものか否かを判定するのに役立つ。

さて、実際にこの戸籍をもとにして通婚圏を分析するにあたって、どの町村をとりあげるかについては、つぎの二点に留意した。(一)④城下町、⑤郷町(在町)、⑥農村、⑦山村、⑧漁村の五類型を設定し、それらを網羅すること。

(二)町村内婚率の比較を考慮し、戸数規模の類似した町村を選ぶこと。その結果、徳島城下の福島町(二四七戸・現徳島市)、三好郡池田大西町(二四一戸・現池田町)、同郡中加茂村(二九五戸・現三加茂町)、同郡中西村(一八二戸・現池田町)、同郡漆川村(二八〇戸・現池田町)、海部郡日和佐浦(二三三戸・現日和佐町)の二町・三村・一浦の通婚圏を分析することにした。

これら二町・三村・一浦の概況を素描しておこう。まず、福島町は城下徳島の東縁部に位置し、藩政時代には商工混在地域であり、現在は木工業の盛んなところである。池田大西町は、吉野川の谷口集落で水運の拠点でもあり、古くから商業集落として繁栄し、また刻み煙草の製造で名を知られていた。中加茂村と中西村はいずれも吉野川上流部の農村で、前者は葉藍、後者は煙草の栽培が盛んであった。漆川村は、祖谷に近い山村で、数箇の小集落から構成されている。日和佐浦は、日和佐川河口の北岸に位置する古い漁村で、藩政時代には魚御分一所がおかれ、漁獲物の販売取締りとともに手数料として販売額の五分の一の徴収にあたっており、現在は遠洋漁業の基地となっている。

三

階層的通婚圏を分析するには、戸籍簿をもとにして、各戸の階層区分の作業からはじめなくてはならない。福島町は持家層を上層、借家層を下層として区分した。池田大西町についても、まず持家層と借家層に分け、さらに前者は土蔵の有無で細分した。つぎに中加茂村、中西村、漆川村の三カ村は、土地生産力の優劣や階層分化の進展に少なからず差違があり、同じ基準による階層区分には問題があるが、ここではいちおう田畑所有面積を共通のメルクマーとし、五反以上所有の上農層（地主・自作農層）、一〇五反所有の中農層（自作・小自作層）、一反以下所有の零細農層（小自作・小作層）の三階層に区分した。日和佐浦の場合、まず各戸の身分をみると、郡付卒二戸、その他四戸を除いた残余の二二七戸がすべて加子（水主）となっている。つぎに職業をみても、漁業二二四戸、水主五二戸で、両者で全体の七五・五％を占めており、農業はわずか六戸にすぎない。したがって日和佐浦は、船舶（漁船・滞船など）所有の有無で、上下二階層に区分することにした。なお船舶所有層といっても、廻船業を営む寺島源七家の

第1表 農山漁村、都市の町村(部落)内婚率(明治期)

類型	町 村 名	町村(部落)内婚率
農 村	北海道琴似村①	29 %
	茨城県結城郡絹川村②	22
	群馬県山田郡川内村②	27
	千葉県山武郡豊海村②	17
	東京府南多摩郡奥方村②	32
	神奈川県足柄郡酒匂村②	44
	長野県下高井郡高石村③	44
	長野県南安曇郡本村③	10
	滋賀県愛知郡薩摩村④	53
	滋賀県高島郡太田村⑤	50
山 村	奈良県葛上郡名柄村⑥	12
	広島県高宮郡飯室村⑦	35
漁 村	富山県砺波郡祖山村⑧	77
	富山県砺波郡下梨村⑧	65
	宮崎県西臼杵郡セツ山村立岩部落⑨	77
都 市	島根県簸川郡小伊津村⑩	72
	島根県簸川郡坂浦⑩	60
	滋賀県高島郡海洋町⑤	45
	奈良県十市郡桜井町⑥	25
	広島県豊田郡御手洗町⑦	67
	広島県高宮郡可部町⑦	47

(注)

- ①伊藤俊夫(1936):婚姻関係より見たる村落の Primary Groups
年報社会学4, pp.302~308
- ②瀬川清子(1936):関東地方の鄙村に於ける婚域と夫妻の年令差
について,年報社会学4, pp.270~273
- ③青木 治(1952):農山村社会における通婚圏と文化の滲透度,
信濃4の1, pp.65~73
- ④中村治兵衛(1948):近畿農村の通婚圏,農業総合研究2の2,
pp.142~150
- ⑤井戸庄三(1965):滋賀県西北部の交通路と集落,金沢大学教育
学部紀要14, pp.49~62
- ⑥藤岡謙二郎(1956):奈良盆地南部の交通路と谷口集落の変遷,
人文地理8の1, pp.1~19
- ⑦森川 洋(1967):明治初年における広島県の都市とその機能,
史学研究99, pp.1~22
- ⑧小山 隆(1933):村落に於ける婚姻と家系の調査,年報社会学
1, pp.263~269
- ⑨近沢敏一(1953):宮崎県の一山村の縁組区域及び内婚率の意義
について,社会学評論12, pp.164~167
- ⑩山岡栄市(1952):漁村社会の構造と漁民における二つの型,社
会学評論9, pp.63~72

四

町村内婚率から検討しよう。これは全婚姻数に対する自町村内婚姻数の比率であり、村落社会学ではふつう内婚率

五〇〇石積、二〇〇石積各一艘を例外として、他のほとんどは一〇石積以下の小船一艘を所有する程度である。

第2表 漆川村の通婚圏(実数)

階層 入出		上層(32戸)		中層 (207戸)		下層(41戸)		計(280戸)	
		婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出
地域	三好郡	32	39	189	181	25	23	246	243
	漆川村 他町村	21	22	131	110	9	12	161	144
他郡		3	0	2	0	0	2	5	2
計		56	61	322	291	34	37	412	389
4 km 圏内		39	48	257	236	27	24	323	308
8 km 圏内		52	60	310	281	34	33	396	374

と略称している。本稿でとりあげた二町・三村・一浦は明治三二年一〇月の市制・町村制施行後の大字(部落)に相当するもので、同年以降に焦点をぼった研究では部落内婚率とよばれている。

さて既往の研究成果から、明治期に限って町村(部落)内婚率をビック・アップすると、第一表のごとくである。これをみて、まず山村と漁村の村内婚率が非常に高く、六〇%を上回っていることが指摘できる。高峻な山岳にとり囲まれた交通不便な隔絶山村は、通婚においても閉鎖性がよく表われている。漆川村の村内婚率は六一・〇%で全国的な傾向と合致しており、階層別では、下層が六七・六%で閉鎖性がとくに濃厚である。

漁村も、山村と同様、農村に比較して村内婚率が高い。山岡栄市(1)は島根県の漁村調査の結果、漁村の村内婚率が高い理由として、つぎの三点をあげている。(一)延縄の製造・乾燥、魚の乾燥などは漁村に育ったものでないと役に立たない。(二)段々畑の急坂の肥運びなどは、平坦部に育った農村の子女には無理である。(三)農村と縁組みすれば、その後の交際費がかさみ、漁村では負担しきれない。ところで日和佐浦の村内婚率は四九・一%であり、階層別では船舶を所有する上層が五一・七%で、下層の四七・四%をやや上回っている。しかし職業からみて、漁業・水主以外の五七戸については、船舶の有

第3表 日和佐浦の通婚圏(実数)

階層 入出 地域		上層 (64戸)		下層 (169戸)		計 (233戸)	
		婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出
海部郡	日和佐浦	38	36	61	60	99	96
	他町村	40	24	85	34	125	58
他郡		4	1	9	5	13	6
城下徳島		0	0	0	1	0	1
計		82	61	155	100	237	161
4 km 圏内		71	56	129	92	200	148
8 km 圏内		75	57	139	92	214	149

第4表 中加茂村の通婚圏(実数)

階層 入出 地域		上層(59戸)		中層 (117戸)		下層 (119戸)		計 (295戸)	
		婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出
三好郡	中加茂村	19	16	29	31	25	10	73	57
	加茂組*	22	26	60	46	43	32	125	104
	その他	27	15	52	34	42	25	121	74
他郡	美馬郡	11	11	26	10	10	5	47	26
	その他	0	4	4	6	3	2	7	12
城下徳島	讃岐	0	0	1	0	1	1	2	1
	淡路	0	1	0	5	0	2	0	8
	その他	0	1	0	0	0	0	0	1
	計	0	1	1	0	0	0	1	1
	計	79	75	173	132	124	77	376	284
4 km 圏内		46	48	99	84	79	50	224	182
8 km 圏内		60	56	135	104	106	63	301	223

* 中加茂村を除く。

無による階層区分それ自体に疑問がのこるので、これを除外し、漁業・水主の一七六戸に限って前記のような階層区分をした方がより有効である。このような修正を加えると、日和佐浦の村内婚率は上層五四・九%、下層五三・四%で両者ともやや上昇するが、その開きはほとんどなくなる。

農村の村内婚率は、第一表のごとく、一〇・五三%と実にバラエティに富んでいて、同じ三好郡でも、中加茂村は一九・七%で低く、中西村は四七・〇%で高いが、ふつうは三〇・五五%程度とみてよいだろう。長野県本村の村内婚率が異常に低いのは、この村が安曇平に位置するわずか五〇戸⁽¹³⁾、たらずの小村で、村内婚の機会に恵まれなかったことによるものであろう⁽¹³⁾。奈良県名柄村の村内婚率も非常に低いが、この村は河内に通じる水越街道沿いの谷口集落であり、その開放的・流動的性格が通婚圏の拡大に影響したものと考えられる⁽¹⁴⁾。中加茂村の村内婚率が中西村に比較して極端に低いのは、前者が後者よりも吉野川の下流部に位置し、狭いながらも平地が開け、集落密度が高く、交通の便利なこと一因が求められる。しかし、それにもまして重要なのは、藩政時代、中加茂村は加茂組と称して西加茂・東加茂・西庄・中庄・毛田の五カ村とともに同じ組(与)頭庄屋の管轄区域に属し、しかもこれら加茂組六カ村は村境が複雑に交錯して、あたかも一村のごとき状態を呈していたことである。そこで加茂組六カ村の組内婚率をみると、五四・四%でかなり高率となる。

都市の町内婚率は、奈良県桜井町を除けば、農村に比較してそれほど低いとはいえない。広島県御手洗町は、瀬戸内海に浮かぶ大崎下島の港町で、幕末には西廻航路の寄港地として賑わったが、島嶼という制約性がつよく作用して町内婚率が非常に高い。これに対して奈良県桜井町は、竹内・初瀬街道沿いの谷口集落で、古くから商業・交通集落として発展し、前記名柄村と同様、開放的・流動的性格が濃厚なため町内婚率が極端に低い。町内婚率はやや高くな

第5表 中西村の通婚圏(実数)

階層 地域 入出		上層(12戸)		中層(69戸)		下層(101戸)		計 (182戸)	
		婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出
三好郡	中西村	4	12	55	54	56	52	115	118
	他町村	12	9	49	60	41	68	102	137
他城讃伊	郡	2	0	5	5	0	3	7	8
	下徳島	1	0	0	0	0	0	1	0
	讃岐	0	1	0	2	0	3	0	6
	伊予	0	0	0	0	0	1	0	1
	計	19	22	109	121	97	127	225	270
4 km 圏内		8	18	82	91	78	95	168	204
8 km 圏内		15	21	101	112	97	113	213	246

第6表 福島町の通婚圏(実数)

階層 地域 入出		上層 (35戸)		下層 (212戸)		計 (247戸)	
		婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出
名東郡	福島町	9	3	46	32	55	35
	城下徳島*	17	10	74	36	91	46
	その他	3	0	22	5	25	5
他淡路	郡	24	2	66	5	90	7
	淡路	0	0	11	3	11	3
	計	53	15	219	81	272	96
4 km 圏内		27	13	135	70	162	83
8 km 圏内		39	13	153	74	192	87

* 福島町を除く。

第7表 池田大西町の通婚圏(実数)

階層 地域 出入		上層(42戸)		中層(131戸)		下層(68戸)		計(241戸)	
		婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出	婚入	婚出
三好郡	池田大西町	23	26	65	58	32	23	120	107
	他村	35	12	106	70	34	20	175	102
他城讃伊そ	郡島岐予他	6	3	8	9	0	1	14	13
	下徳	0	6	0	3	0	3	0	12
	讃岐	2	4	2	10	1	0	5	14
	伊予	1	1	1	5	0	0	2	6
	その他	0	0	1	2	0	0	1	2
	計	67	52	183	157	67	47	317	256
4 km 圏内		39	35	134	104	59	35	232	174
	8 km 圏内	52	38	151	120	64	40	267	198

るが、この桜井町と類似の都市機能をもつのが池田大西町であり、階層別では、上・中層で低く、下層で高い。つぎに福島町の町内婚率は二三・九％で低い、城下徳島では六一・六％とかなり高率となる。なお、階層別にみると、上層一七・六％、下層二六・〇％で、上・下両層間に大きな差があるが、これは下層で近隣婚が多かったことを示している。

五

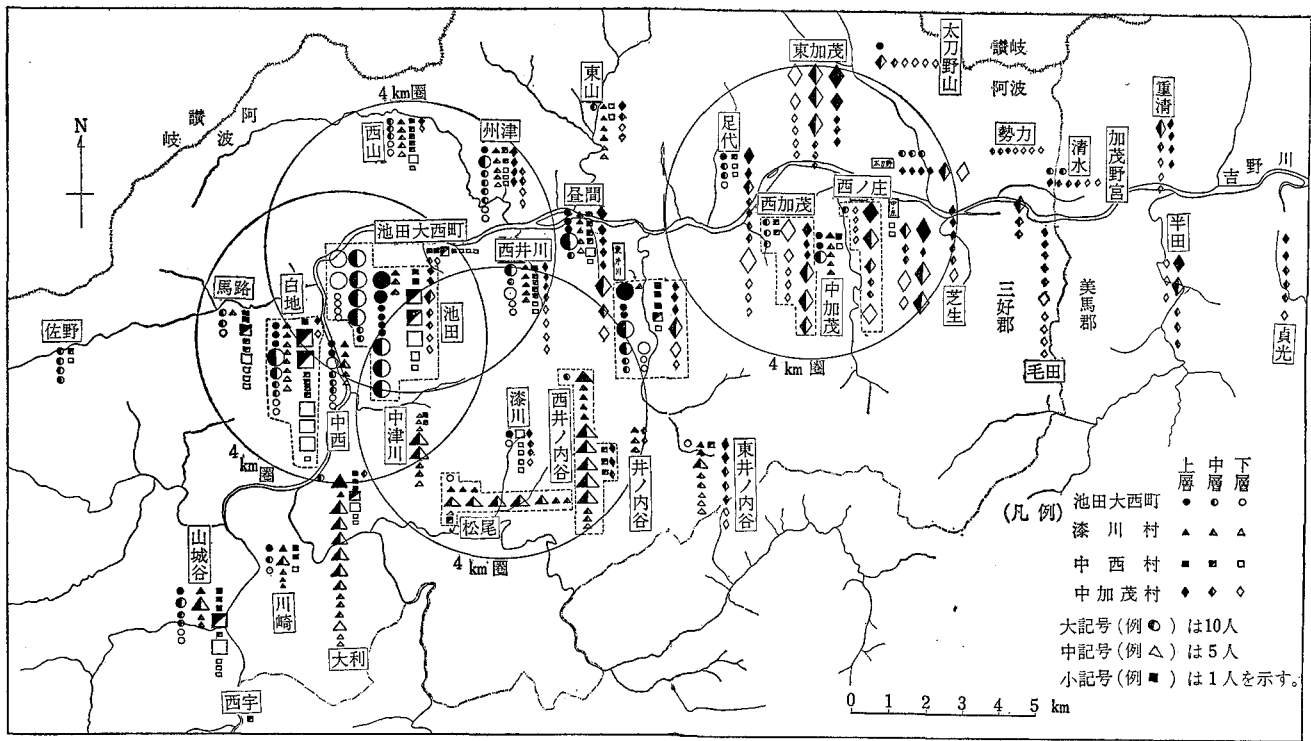
通婚圏の区分の基準は、①行政区画による区分、②当該町村を中心とする同心円状の区分、の二つに大別される。まず①は、④町村(部落・大字)内、⑤町村(明治二二年市制・町村制施行後の行政町村)内、⑥郡内、⑦国内・県内、⑧国外・県外、に五区分するもので、社会学の伊藤俊夫⁽¹⁵⁾、鈴木栄太郎⁽¹⁶⁾、中村治兵衛⁽¹⁷⁾、山本登⁽¹⁸⁾、山岡栄市⁽¹⁹⁾、地理学の藤岡謙二郎⁽²⁰⁾、民俗学の青木治⁽²¹⁾らがこれを採用している。この方法は、郡境、県境、国境などが、通婚圏にどの程度の影響を及ぼしているかを検証する場合には有効であるが、当該町村がこれら郡境、県境、国

境に近接しているようなときは適當でない。

つぎに②は、当該町村を中心として半径四キロメートル、八キロメートル、一二キロメートルなどの同心円を描き、それぞれ円内の各町村との通婚数をカウントする方法であり、通婚圏を文字通り圏構造として把握できるのが大きなメリットである。この方法は、社会学の瀬川清子⁽²²⁾、地理学の森川洋⁽²³⁾らが採用しているが、調査対象地域の地形、交通、その他の条件により、通婚圏が必ずしも同心円状になるとは限らないのが欠点である。このため本稿は、通婚圏の空間的ひろがりを見る方法として、①および②を併用することにした。

六

まず①の方法で検討しよう。明治三年以前の通婚を、明治二二年市制・町村制施行後の行政町村と関係づけて考察してもまったく無意味である。それゆえ郡内婚（町村内婚を含む）率からみると、漆川村が九九・一％の高率を示し、以下、中西村九五・六％、日和佐浦九五・〇％、池田大西町八七・九％、中加茂村八三・九％となり、最低は福島町の六九・七％である。つまり漆川村、中西村、日和佐浦の三カ村では、郡境を越えての通婚はほとんどみられない。鈴木栄太郎⁽²⁴⁾は、岐阜県加茂郡坂祝村の七部落の事例研究の結果、郡境および旧藩時代の領邑の境界がもつとも決定的に通婚圏の範域を定めており、たとえ地理的近距離にあっても郡境を越えての通婚関係はあまり存しない、と指摘している。ところで、中加茂村の郡内婚率が、漆川村、中西村、日和佐浦の三カ村に比較して一〇％余も低いのは、第一図のごとく、中加茂村が三好・美馬両郡の郡境に近接しており、この郡境を越えて半田村、重清村、貞光村、脇町など美馬郡との通婚が一・一％を占めているからである。中加茂村の場合、郡内婚率の八三・九％に美馬

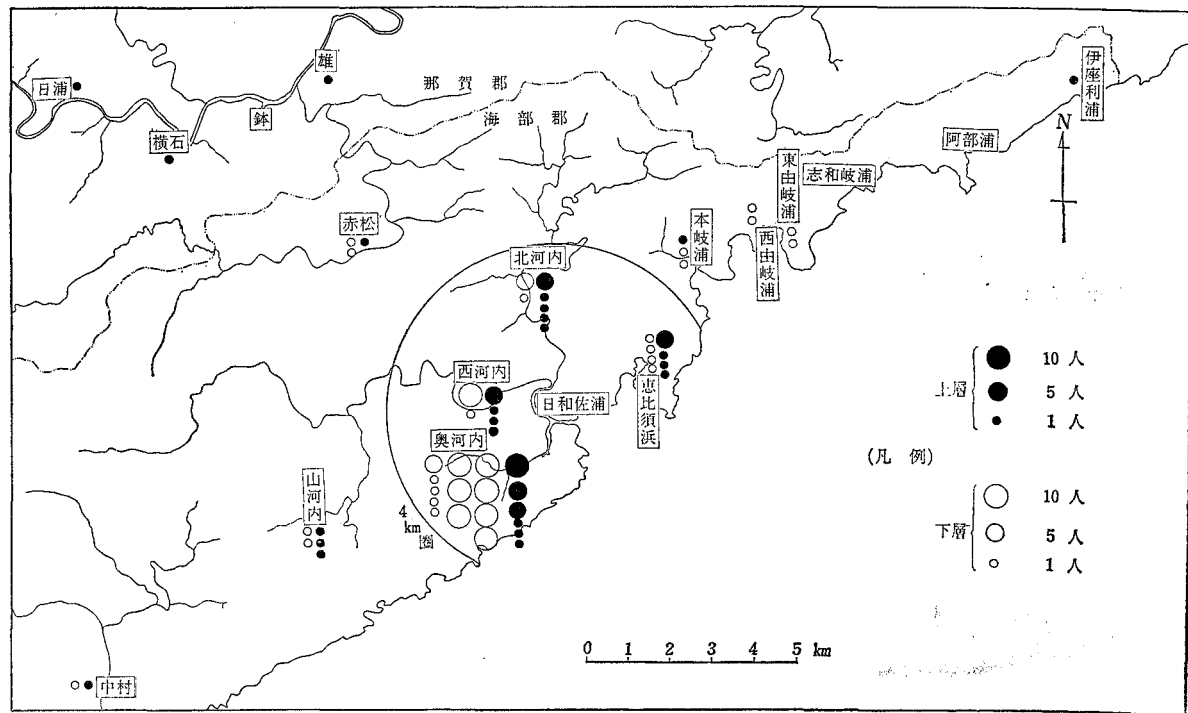


第1図 池田大西町・漆川村・中西村・中加茂村の通婚圏（町村内婚は省略）

郡の一・一％を加えれば、漆川村など三カ村の郡内婚率とほぼ同率となり、前記の鈴木説はあたらない。さらに池田大西町、中加茂村、中西村の三カ町村では、第四・五・七表のごとく、国境を越えて讃岐との通婚がかなりみられる。三好・美馬両郡の農家では、ごく最近まで、耕作用の役牛を毎年六月中旬から約一カ月、一月上旬から約二カ月、讃岐平野の農家に貸す慣行があった。この役牛を、阿波側では米牛、讃岐側ではカリコ牛とよんでおり、その移動には六地藏越、猪ノ鼻峠越、東山越などの阿讃間の交通路が利用されていた⁽²⁹⁾。このような慣行が、両地域の通婚にも影響を及ぼしたのであろう。特殊な条件が働けば、国境、藩領も通婚の障壁になるとは限らないのであり、この点でも前記の鈴木説は的を射ていない。また福島町で淡路との通婚が一四件みられるのは、阿淡両国二五万石が徳島藩の支配下にあり、平素から人的・経済的な交流が盛んであったことに基因している。

つぎに②の方法で検討しよう。既往の明治期の通婚圏研究をみると、鈴木栄太郎⁽²⁶⁾は四〇五里四方の地域を通婚圏としており、瀬川清子⁽²⁷⁾は関東地方の九カ村の幕末・明治初期の通婚圏を検討した結果、通婚の九一％が半径三里圏内に包括されることを報告している。池野茂⁽²⁸⁾は、五七カ町村の事例研究に基づき、町場を除けば、通婚圏はほぼ四キロメートル圏内に含まれることを明らかにしている。近沢敬一⁽²⁹⁾は、宮崎県の山村を調査し、よばいの可能性の範囲と関連づけて、半径二キロメートル以内の通婚が多いことを指摘している。

本稿では、以上のような既往の研究成果を参照し、四キロメートル圏（第一次通婚圏）と八キロメートル圏（第二次通婚圏）に区分することにした。まず四キロメートル圏内婚率は、日和佐浦の八七・四％がもっとも高く、以下、漆川村七八・七％、中西村七五・一％、池田大西町七〇・八％、福島町六六・五％、中加茂村六一・五％の順となる。つぎに八キロメートル圏では、漆川村の九六・一％が最高で、以下、中西村九二・七％、日和佐浦九一・二％、



第2図 日和佐浦の通婚圏 (村内婚は省略)

池田大西町八一・一％、中加茂村七九・四％、福島町七五・八％となり、この八キロメートル圏内婚率の順位はさきにみた郡内婚率の順位と完全に一致している。すなわち、漆川村、中西村、日和佐浦の通婚圏は八キロメートル圏内にはほぼ完全に包括されるといってよい。

日和佐浦が、四キロメートル圏と八キロメートル圏で通婚率にそれほど大きな開きがみられないのは、第二図のごとく、東南は海、西北は山がちで、四キロメートル圏と八キロメートル圏の間の集落密度がきわめて疎であるからである。なお速水融⁽⁹⁾は、紀伊国牟婁郡須賀利浦の幕末の通婚圏について、京都、大阪、伊勢、志摩、大和、三河、淡路、越中など遠方婚が多いことを指摘し、その理由として、陸上交通に対して海上交通の便利さをあげている。日和佐浦は、須賀利浦のような廻船業が発達しなかったので、遠方婚はまったくみられない。日和佐浦とは反対に、中加茂村は、吉野川の沖積平野が東方にラップ状に開け、集落密度が高く、交通も便利のため、通婚圏がはやくから拡大されていたものとみられる。

福島町と池田大西町は、他の四カ村に比較して、通婚圏がひろく、遠方婚が多い。第一表にあげた滋賀県海津町の郡内婚率は七二％、奈良県桜井町の郡内婚率は五六％、広島県御手洗町の八キロメートル圏内婚率は七六・八％、広島県可部町の八キロメートル圏内婚率は七一・四％であり、福島町、池田大西町とほぼ同じ傾向を示している。このように都市の通婚圏が農村、山村、漁村に比較して一般に広いことは否定できないが、壬申戸籍に依拠した研究では、そのことが過大評価されるという欠点を指摘したい。すなわち、壬申戸籍では戸籍編成以前の一家転住が不明であり、たとえば安政五年（一八五八）四月、X村のA家から同じX村のB家へ稼入りした妻について、その後、文久二年（一八六二）五月、このB家が一家をあげてX村からY町へ転入してきた場合、この妻の婚入は、実質的にはX

第8表 福島町の稼人の出身地

国	郡	名	名東	板野	名西	阿波	麻植	美馬	三好	勝浦	那賀	海部	淡路	計
町	村	数	14	21	7	9	6	6	3	5	17	4	8	100
戸		数	22	30	8	9	9	7	3	5	26	4	11	134

村の村内婚であるにもかかわらず、壬申戸籍ではX村からY町への婚入としてカウントされてしまふ。じつさい藩政時代には、①都市は農村に比較して五人組その他の経済的強制が微弱であったこと、②町人は百姓のごとく貢租の対象とはならず、門閥的豪商や本町人は別として、店借人は町費負担の義務がなく、店賃を納めるのみで負担がきわめて軽かったこと、③都市では新しい職業がえやすいこと、などの理由で都市への人口集中がはげしく⁽³⁾、岸本実⁽²⁾の研究によれば、徳島藩では享保文化年間(約九〇年)に九八カ村から一四八一戸の離村農家があり、その四三%が城下徳島、一五%が郷町に転住したことが明らかである。

さて、庚午戸籍から稼人および来人を摘出すると、福島町一三四戸(すべて稼人)、池田大西町五七戸(稼人一九戸、来人三八戸)、日和佐浦二〇戸(すべて奥河内村からの稼人)、中西村四戸(すべて来人)、漆川村四戸(稼人三戸、来人一戸)であり、福島町と池田大西町でとくに多く、全戸数に対する稼人・来人の比率は、福島町五四・二%、池田大西町二三・六%とかなり高い。なお、福島町の稼人の出身地は、第八表のごとく、阿波全郡および淡路の一〇〇町村に及び、とくに那賀郡椿村の七戸が注目される。これに対して池田大西町の稼人・来人の出身地は、三好郡池田村が二二戸で抜群であり、郡外は美馬郡半田村が一戸あるのみで、その範囲は狭く、城下町と郷町との人口吸引力の差があらわれていて興味深い。

つぎに福島町と池田大西町の稼人・来人、福島町の分家二五戸(城下の他町からの分家)について、その転入の年代をみると、第九表のごとく、もつとも古いのは文政八年(一八二五)であ

第9表 稼人・来人・分家の転入年代

年 代	福 島 町		池田大西町	
	稼人	分家	稼人	来人
文政8 1825	1			
天保2 1831	3			
" 4 1833		1		
" 7 1836	1			
" 10 1839	1			
" 12 1841	1	1		
" 13 1842		1		
" 14 1843	2			
弘化2 1845	1			
" 3 1846		2		2
" 4 1847				1
嘉永元 1848	1			
" 2 1849	2		1	
" 3 1850	1			
" 4 1851	3	2		
" 6 1853		1		
安政元 1854		1		
" 2 1855	1			
" 3 1856	1			
" 4 1857		2		
" 5 1858	1			
" 6 1859	2			
万延元 1860	1	1		
文久元 1861	1			
" 2 1862			1	
" 3 1863	1	1		1
元治元 1864			1	
慶応元 1865		3		
" 2 1866	1		1	1
" 3 1867			1	
明治元 1868	1		3	1
" 2 1869	1	1	4	
" 3 1870		1	2	
不 明	106	7	5	32
合 計	134	25	19	38

り、天保末年から多くなっている。したがって、正確を期すには、これら稼人・来人、さらに福島町の場合は城下の他町からの分家に関する限り、転入前の通婚はすべて除外しなければならない。しかし、本稿では、それらの一部しか転入年月が判明しないこと、壬申戸籍による従来の通婚圏研究と対比したいこと、などの観点からあえてそのような修正を加えなかった。なお、これらの稼人・来人は、都市への転入後も出身地との縁を断ちがたく、婚姻慣習や相手の家柄その他のよくわかった父租の地との通婚関係がながくつづいたであろうことは容易に推察される。都市の通婚圏が広く、遠方婚が多い理由として、都市の日常生活圏、経済圏が広いこと、交通が便利なこと、「町場への人々の憧憬」など、従来の常識的な説明のほか、いままで述べてきたようなことにも十分な配慮がなされなくてはならない。なお、池田大西町の稼人・来人を階層別にみると、稼人は上層一戸、下層一八戸、来人は上層四戸、中層二八

第10表 実家・婚家の階層比較
(中西村)

実家	階層		
	上層	中層	下層
	0	10(4)	3
婚家	33(8)	22(6)	1
	23(6)	21(3)	0

(注) カッコ内は男子 (内数)

戸、下層六戸で、中・下層が圧倒的に多く、これら稼人・来人は中・下層の通
婚圏拡大に少なからざる役割を果たしたものと考えられる。

七

階層と通婚圏の広狭の関係はどうだろうか。郡内婚率、四キロメートル圏内
婚率、八キロメートル圏内婚率をみると、池田大西町と中西村では、上層で低
く、下層で高い。福島町でも、八キロメートル圏を除けば、通婚圏は上層で広
く、下層で狭い。中加茂村でも、四キロメートル圏を除けば、同様の傾向を示
している。圈川村と日和佐浦では、階層と通婚圏の広狭には明瞭な相関関係はみられない。しかし、一般に通婚圏は
上層で広く、下層で狭いことが指摘できるが、その理由としてつぎの二つが考えられる。(一)上層では結婚相手の選択
範囲が自町村内ではごく限られており、いきおい他町村に相手を求めざるをえない。たとえば中西村の村内婚のう
ち、実家と婚家双方の明瞭なもの一一三件について、双方の階層を比較すると、第一〇表のごとく、同階層間の通婚
が四八件で四二・四%を占めており、上層では一段低い中層への婚出が目だっている。中層でも、上層への婚出は一
件しかないが、下層への婚出は三三件を数えており、村内婚に関しては、同階層よりも一段低い階層への婚出が顕著
である。なお上層と下層の通婚は皆無である。以上、中西村の例から、上層は同階層の結婚相手をひろく他町村に求
めざるをえない事情がわかるだろう。(二)上層は下層に比較して日常生活圏、経済圏が広い。農村であれば、地主層は
自町村を越えて広域に土地を所有しており、水利その他で他町村に対して利害関心が強い。都市では、たとえば池田

第11表 吉野川上・下流と通婚圏の関係

		上流部	下流部
中加茂村	町村数	17	28
	婚入	106	187
	婚出	77	127
池田大西町	町村数	11	21
	婚入	40	66
	婚出	18	33
中西村	町村数	7	13
	婚入	34	57
	婚出	24	101

大西町の場合、上層の四二戸の職業をみると、刻み煙草商業一九戸、荒物商業七戸をはじめ商業が圧倒的に多いが、下層は六八戸のうち日雇稼が四七戸を占めている。商業と日雇稼では、日常生活圏、経済圏に大きなちがいがみられるのは当然といえよう。

三好郡中加茂村、池田大西町、中西村の三カ町村の通婚圏を吉野川の上下流の関係でよりミクロに考察してみよう。具体的には、中加茂村は三好・美馬両郡、池田大西町と中西村は三好郡について、これら三カ町村と通婚のみられる各町村を、三カ町村からみて吉野川の上・下流のいずれに位置するかで区分する。たとえば三好郡昼間村であれば、中加茂村の場合は上流部、池田大西町、中西村の場合は下流部として区分しており、第一一表のような結果がえられた。すなわち、婚入・婚出を問わず、三カ町村とも下流部との通婚が頻繁であり、とくに中西村の婚出は下流部が上流部の四倍強となっている。このことは、このあたりでは下流部に向かって沖積平野が開け、集落密度、人口密度が濃密になることに基因するものといえよう。

従来の通婚圏研究では、婚入・婚出を比較すれば、婚入圏が狭く、婚出圏が広いのが定説となっている⁽³³⁾。壬申戸籍では、婚入については戸主の妻、母、長男の妻など戸籍編成以前の通婚は把握できるが、婚出については戸籍編成後のごく短い期間の通婚しか確認できない。このため壬申戸籍に依拠する限り、婚入・婚出はその時期に大きな開きがあり、時代が下るにつれて通婚圏が拡大することを考えると、婚入圏が狭く、婚出圏が広くなるのは当然のことといえよう。

徳島藩の二町・三村・一浦の四キロメートル圏内婚率をみると、日和佐浦は婚入八四・四%、婚出九一・九%、漆川村は婚入七八・四%、婚出七九・一%、中西村は婚入七四・七%、婚出七五・五%、福島町は婚入五九・五%、婚出八六・四%、中加茂村は婚入五九・五%、婚出六四・一%となり、いずれも婚出の方が高率となるが、池田大西町のみ婚入七三・二%、婚出六七・九%で逆になっている。このように四キロメートル圏の枠でみたところ、池田大西町を例外として、婚入圏の方が婚出圏よりも広く、従来の定説とは反対の結論がえられた。ただ福島町を除けば、婚入・婚出の地域差はほとんどなく、両者の比較それ自体にあまり意味が認められない。なお、福島町では、すでにみたごとく、四キロメートル圏内婚率は婚出の方がいちじるしく高く、八キロメートル圏内婚率についても婚入七〇・五%、婚出九〇・六%で、両者の開きが大きい。実家と婚家の職業を考えると、実家が農業で婚家が商業の場合はそれほど問題はないが、この逆は過重な農作業、農村の因習などのため非常な困難が伴うことが、その理由としてあげられる。さらに、福島町の城下徳島の通婚率が婚入の五三・六%に対して婚出が八四・三%に達することが、このことを裏付けてくれる。

八

以上、明治三年のいわゆる庚午戸籍をもとにして、徳島藩の二町・三村・一浦の幕末・明治初期の通婚圏を種々の角度から分析してきた。その結果、階層別にみると、上層は下層よりも通婚圏が広いこと、婚出圏が婚入圏よりも広いという従来の定説には疑問があることなど、二、三の新知見をえることができた。しかし、数カ町村では事例数が乏しいこと、戸籍に記載された民産だけで大胆に階層区分したことなど、のこされた課題は少なくない。こんごも徳

島藩内でひろく庚午戸籍の掘りおこしに努めるとともに、戸籍以外の資料を多く援用して階層区分の厳密を期する必要があると思う。

△付記V

本稿で使用した戸籍の所蔵者はつぎのとおりである。福島町——福島市役所市史編さん室、池田大西町・中西村・漆川村——三好郡池田町役場、中加茂村——三好郡三加茂町横田武雄氏、日和佐浦——海部郡日和佐町北村雅勝氏。なお、これら戸籍の分析・整理は徳島大学教育学部学生小川寛子さんの援助によるところが大きい。付記して心からの謝意を表する。

注

- (1) 八木佐市(一九五三)『通婚圏調査に関する二・三の問題』ソシオロジ二号 九頁
- (2) 池田義祐(一九五四)『通婚圏研究の社会学的意義』大谷大学社会学年報六号 一〇～一一頁
- (3) 村落社会学では封鎖性という用語が常用されているが、以下、本稿ではこれを閉鎖性におきかえたい。なお、これは筆者のこのみによるものである。
- (4) 藤岡謙二郎(一九五六)『奈良盆地南部の交通路と谷口集落の変遷』人文地理八巻一号 一～一九頁
- (5) 森川洋(一九六七)『明治初年における広島県の都市とその機能』史学研究九九号 一～二二頁
- (6) 八木佐市 前掲(1) 一～一二頁
- (7) 福島正夫によって庚午戸籍と名づけられた。
- (8) 福島正夫(一九五九)『戸籍制度と「家」制度——「家」制度の研究——』東京大学出版会 一〇一～一〇二頁
- (8) 井戸庄三(一九六八)『庚午戸籍の歴史地理学的研究(1)——戸籍編製規則を中心として——』徳島大学教養部地理学報告一号 一～一二頁
- (9) 井戸庄三(一九七一)『明治初期戸籍の系譜とその歴史地理学的意義』『織田武雄先生退官記念人文地理学論叢』柳原書

店 六五九〜六七二頁

- (10) 徳島藩の棟付改は、明暦二年（一六五六）を嚆矢とし、藩政時代を通じて五〇〜六〇年おきに四回おこなわれた。なお、詳細は左記の文献を参照されたい。

上田藤十郎（一九三八）「阿波池田の棟付改に就いて」 昭和商学報第一附録 一〜三四頁

- 岸本実（一九五九）「藩政期の人口資料としての棟附帳」 徳島大学学芸学部紀要（社会科学）八卷 一〇九〜一二六頁

- (11) 山岡栄市（一九五二）「漁村社会の構造と漁民における二つの型」 社会学評論九号 六三〜六四頁

- (12) 明治七年現在で五三戸である。

長野県総務部地方課編（一九六五）『長野県市町村合併誌』（総編） 長野県 八八頁

- (13) すでに八木佐市、井森陸平らが、大町村では町村内婚の可能性が大きく、小町村ではその可能性が小さいという仮説を提示している。その根拠として、井森は、小町村では自町村内で適当な結婚相手をみつけるのが困難で、いきおい他に求めざるをえないこと、さらに農村では、一般に人口移動がその大きさに比例する都市とは異なっており、人口のもっとも少ないところ（小町村）が人口移動がもっとも少ないとは限らないこと、の二点をあげている。さらに井森は、鳥取県法美郡津ノ井村の通婚圏調査の結果、大部落の杉崎（部落内婚率二三・五％、以下同じ）、紙子谷（二七・〇％）と、小部落の海蔵寺（九・五％）、瀬谷（一三・九％）とで部落内婚率に明瞭な差があることを実証した。

八木佐市 前掲（一） 二五〜二六頁

- 井森陸平（一九四三）『農村の社会と生活』 時代社 二二一〜二三三頁

- (14) 藤岡謙二郎 前掲（4） 一〇〜一三頁

- (15) 伊藤俊夫（一九三六）「婚姻関係より見たる村落の Primary Groups」 年報社会学四輯 三〇二〜三〇八頁

- (16) 鈴木栄太郎（一九四〇）『日本農村社会学原理』 時潮社 四八六〜五〇九頁

- (17) 中村治兵衛（一九四八）「近畿農村の通婚圏」 農業総合研究二卷二号 一四二〜一五〇頁

- (18) 山本登（一九五〇）「通婚関係よりみた山村共同体の封鎖性と平等性」 社会学評論三号 一二三〜一五一頁

- (19) 山岡栄市 前掲（11） 六三〜七二頁

- (20) 藤岡謙二郎 前掲（4） 一〜一九頁

- (21) 青木治(一九五二)「農山村社会における通婚圏と文化の滲透度」 信濃四卷一号 六五〇七三頁
- (22) 瀬川清子(一九三六)「関東地方の鄙村に於ける婚域と夫妻の年令差について」 年報社会学四輯 二七〇〇二七三頁
- (23) 森川洋 前掲(5) 一〇二二頁
- (24) 鈴木栄太郎 前掲(16) 五〇八〇五〇九頁
- (25) 阿讃間の役牛移動については、左記の文献を参照されたい。
内田秀雄(一九七一)「役牛移動を中心として観たる阿波に於ける農業地理の一特質に就いて」『日本の宗教的風土と国土観』 大明堂 二六七〇三一頁
- (26) 鈴木栄太郎 前掲(16) 五〇九頁
- (27) 瀬川清子 前掲(22) 二七一頁
- (28) 池野茂(一九六八)「明治初期の婚姻圏に関するノート」 関西学院高校論叢一四号 一六〇一七頁
- (29) 近沢敏一(一九五三)「宮崎県の一山村の縁組区域及び内婚率の意義について」 社会学評論一二号 一六五頁
- (30) 速水融(一九五三)「近世における一漁村の人口動態——紀伊国牟婁郡須賀利浦——」 三田学会雑誌四六卷一二号 七一頁
- (31) 岸本実(一九六八)『人口地理学』 大明堂 一〇六〇一〇七頁
- (32) 岸本実(一九五九)「阿波における農民離村現象」 徳島大学文学部紀要(社会科学) 九卷 六四〇六五頁
- (33) 八木佐市 前掲(1) 一七〇二二頁